

山形県埋蔵文化財調査報告書第7集

堂の前遺跡

昭和50年度調査略報

山形県教育委員会

堂の前遺跡

昭和50年度調査略報

昭 和 51 年 3 月

序

堂の前遺跡は、昭和49年度以来、国庫補助事業として発掘調査を実施しております。

この遺跡は、近接する史跡「城輪柵跡」との関連で重要視されていたところ、この附近一帯に農業基盤整備事業が計画されたため、緊急に遺跡の性格と範囲の確認をする必要が生じ、発掘調査に着手することになったものであります。

本報告書は、昭和50年度調査結果の概要をとりまとめたものであります。多くの方々にご活用ご理解いただければ幸いと存じます。

最後に、調査にあたって種々ご協力をいただきました調査委員の先生方ならびに八幡町教育委員会、地元の方々に厚くお礼を申しあげます。

昭和51月3月

山形県教育委員会
教育長 赤星 武次郎

例　　言

- 1 この冊子は、堂の前遺跡の昭和50年度調査の概略を述べたものである。
- 2 出土遺物に関しては後日まとめて報告することとし、この冊子では調査経過や発見遺構についての概略を述べるにとどめた。
- 3 挿図・本文中に方位記号として使用したN字は、Fig 1を除いて真北を意味し、挿図中方位記号がないものは、図の天位を真北とした。
- 4 本冊子の執筆・写真撮影ならびに編集は尾形與典が担当した。

目 次

I	今までの経過	
	環境	1
	第1次調査のあらまし	1
II	昭和50年度調査計画	1
III	第2次調査	
	調査経過	4
	まとめ	6
IV	第3次調査	
	調査経過	6
	層序	7
	遺構	8
	遺物	13
	まとめ	14
V	第4次調査	
	調査経過	14
	遺構	15
	まとめ	17

插 図

Fig 1 調査区概念図	2
Fig 2 SB003・埋没部材 関係図	10
Fig 3 第2調査区遺構実測図	11
Fig 4 SE001井戸跡実測図	16

付 図

- 付図1 第1調査区遺構実測図
 付図2 L1地区遺構実測図

付 表

表1 調査計画	3
表2 調査実施状況	3
表3 層序対比表	8

図 版

- PL 1** 1 S3・S4鉄塔予定地遠望
 2 S3発掘状況（北東より）
PL 2 1 S3、C5区遺物出土状況(1)
 2 S3、C5区遺物出土状況(2)
PL 3 1 S1発掘状況（南西より）
 2 S1、E5区遺物出土状況
PL 4 1 第3次調査、発掘区景観
 2 第1調査区発掘状況（部分）
PL 5 1 SB001河原石散布状況
 2 SB003建物跡
PL 6 1 SB001、埋没部材
 2 埋没部材北西隅部（北より）

- PL 7** 1 SB002建物跡
 2 VII G162区 柱根
 3 VII G164区 柱根
PL 8 1 SB004 柱根（東より）
 2 SD004溝跡（南より）
PL 9 1 第2調査区、発掘前状況
 2 第2調査区、発掘状況
PL 10 1 SD002 遺物出土状況
 2 SK049 遺物出土状況
PL 11 1 L1地区、発掘状況
 2 IV163～II C163区
 3 II E157～II E162区
PL 12 1 SE001井戸跡（東より）
 2 SE001井戸跡全景

I 今までの経過

環 境

堂の前遺跡は飽海郡八幡町法連寺字堂の前にある。日向川・荒瀬川の合流点近く荒瀬川の旧氾濫原上に位置し、標高は約15mを測り、西にいくにつれて低くなる。

ここから真西に約1kmのところに、出羽国府跡と推定されている史跡・城輪柵跡があり、ほかにも歴史時代の遺跡が近在には数多く分布する。また本遺跡の東側丘陵上には、願瀬山・泉谷地両古窯跡群などを擁する庄内東部丘陵地域古窯跡群があり、本遺跡との関係で興味のもたれるところである。また本遺跡の北東、上巣岡の大物忌神社・口ノ宮の存在も何かを暗示しているように思われる。

第1次調査のあらまし

昭和49年に国庫補助を得て実施した第1次調査は、本遺跡の範囲確認と性格究明を目的としたものであった。

調査の目的からまず遺構の分布範囲を把握するべく、東西180mにおよぶ幅2mのトレンチを設定したところ、SB001基壇跡をはじめとして先に報告した様な種々の遺構が発見された。調査の密度を遺構の存否確認にとどめたため多くは不明のまま残ったが、遺物などからみて存続時期にかなりの幅をもつものと思われた。

II 昭和50年度調査計画

昭和50年度調査は、昨年度第1次調査に引き続き、国庫補助を得て山形県が実施する、3年度にわたる分布調査の第2年次にあたる。

調査は、労働力の確保の点などから調査時期を3期に分け、春・夏・秋期の農閑期に実施することにした。

春期を第2次調査とし、夏期を第3次、秋期を第4次調査とした。

調査目的を次の3点とした。

- 1) 第1次調査時のボーリング探査の成果にもとづいて推定した西外画地域の発掘調査。
- 2) ボーリング探査による東・南外画の追求。
- 3) 第1次調査の成果にもとづく、SB001基壇跡地区とⅦA66地区の精査。

このうち(1)については、東北電力株式会社によって送電用鉄塔の建設が5カ所ほど予定され(註1)、そのうちの大鉄塔建設予定地が調査対象地区と近接したため、その建設



Fig. 1 調査区概念図

予定地の調査を行なうことによってこれに代えることにした。

このほか小鉄塔4基分があったが、S2鉄塔に関しては、第1次調査の際VA64～67区の試掘調査によって遺構、遺物の認められない泥炭層であることが判明していたため、調査対象から除外した。

これらの調査事項を表1のように編成し、表2のように実施した。

調査計画

表 1

次 数	調 査 事 項	期 日
第 2 次	東・南外画のボーリング探査 S1～S4鉄塔建設予定地の試掘調査	4月～5月
第 3 次	SB001地区、VA66地区の精査	7月～8月
第 4 次	ボーリング探査（第2次）の結果にもとづく試掘調査 L1鉄塔建設予定地の試掘調査	10月～11月

調査実施状況

表 2

次 数	調 査 事 項	期 日
第 2 次	東外画ボーリング探査 S1～S4鉄塔予定地試掘	4月14日～ 5月11日
第 3 次	SB001地区、VA66地区精査	7月1日～ 8月5日
第 4 次	SE001井戸跡、L1鉄塔予定地試掘 南外画ボーリング探査及VA0234、VA0309区等の試掘	10月20日～ 11月15日

第1次調査に引き続き、次の諸氏に調査委員を委嘱し調査の指導をお願いした。

柏倉亮吉（山形大学名誉教授）、川崎利夫（天童市立第4小学校教諭）、桑原滋郎（宮城県多賀城跡調査研究会技師）、佐藤巧（東北大学教授）、佐藤慎宏（酒田市立酒田中央高等学校教諭）（五十音順、敬称略）

註1 該当する建設予定鉄塔は羽後幹線の一部であるが、東北電力に問い合わせたところ各鉄塔の名称が未定であったため、当方では識別のために大鉄塔をL1、小鉄塔を北から順にS1～S4と通称した。

III 第2次調査

調査期間	4月14日～5月11日
調査地区	S1、S3、S4各鉄塔建設予定地 東ラインボーリング探査
発掘面積	76m ²
調査者	尾形與典、佐藤庄一、名和達朗

調査経過

小鉄塔予定地の試掘から調査を開始したが、調査に先立ちS3、S4の発掘区の設定を行なった(PL1-1)。これらは遺跡の地区割りから外れているので、地区割りとは無関係に発掘区毎に独自に2m×2mの座標を設定した。各々北東に面している辺を概念的に北辺とし、北西の隅から東にB・C・D・E区とし、同様に南へ2・3・4・5区とした。そしてそのグリッドの呼称は例えばB2区などとした。

調査はまずS3の四隅の発掘から始めた(4月15日)。土層観察によって、こここの地層は大別して3層あり全体で6層に細別されることがわかった。第1層は耕土であり10～15cmの厚味をもつ。第2層は2分され、2a層は暗灰褐色粘質微砂で形成され25～45cmの厚味をもつ。2b層は灰黒色砂質粘土で遺物を包含し、15～25cm。第3層は3分され、掘り下げた範囲内では観察できるところとできないところがある。3a層は遺物を包含する層で、2b層と3b層の混合層である。約15cm。3b層は青灰色砂質粘土層で遺物を含まず、厚さは不明。この途中までしか掘り下げていない。3c層は暗青灰色砂質粘土によって構成され、有機物を多量に含むが遺物は含まない層である。3b層の下にある層と思われるがE2区では3b層に斜めに挟まった状態で部分的に観察された。

3層まで掘り下げた時点でE2、E5両区に浅い落込みが観察された(4月16日)が、自然的なものと思われた。同日B5区では杭状の木製品の遺存が認められた。D3区を3層まで掘り下げたところ、グリッドのほぼ半分を占める大きさで方形の角の部分と思われる落込みがみられたので、その全貌を把握すべくC4・D4区を発掘した(4月16日)が、その続きはとらえられなかった。落込みは自然に消滅してしまうものであった。

一方B5区ではグリッドの南半に溝らしきものが観察され、これを追求すべくC5区に拡張したところ、結局落込みの延長は把えられなかつたが多量の遺物(木製品、土器等)が検出された(4月17日)。

発掘した他のグリッドでは遺構が認められなかつたので、S3における調査をB5・C

5画区に絞り、この区域の分層発掘を行なった（4月17日～18日）。その結果次の様なことが判明した。

地表から50cm程のところに密接して4層にわたる遺物の堆積がみられ（PL2）、その構成は次の様になる。全層から箸状の木製品が出土するがとくに2層に多い。このうち2・3層からは先端に焼け焦げが見られるものがある。2・3・4層からは木製櫛櫛挽きの皿が出土しており、3層からは用途不明の木製品が出土している。土器に関しては4層から須恵器片が、2・3層からは須恵系土器（註1）片が出土している。他に3・4層から計3個の土錐が出土しており又1・2層からは矢板様の木製品も出土している。

これらの遺物の出土状態から見て、この地域は川の岸辺のような灘みであったのではないかと思われる。

S3は結果的に8グリッド32m²を調査し（PL1～2）4月21日に埋戻しを終えた。

S4は4月17日からS3に並行して調査を始めたが、この地区では遺構は全く見られなかった。しかしB2区・E2区などでは地表下25cmのところに薄い遺物包含層がみられ、須恵器・土師器などを含む土器の小片を平ザルに約2杯ほど採集した。S4は最終的に5グリッド20m²を発掘し、4月21日に埋戻しを終えた。

S1は県道の北・荒瀬川河畔にあり、俗称城輪街道に接して南に位置する。

まず四隅のグリッドを発掘したが、地層は耕土下35cmほどで黄褐色粘質砂層が現われ、この直上に遺物を包含する層がみられる。遺構は認められず、遺物に関してはE5区で復原可能の須恵系土器片が河原石の傍から出土（PL3-2）したほかは、須恵器や須恵系土器などの小片のみである。S1は8グリッド23m²を発掘し（PL3-1）、4月23日でほぼ発掘を終え、翌24日には写真撮影・測図などを行ない同日埋戻しを完了した。なおS1は正確には茅針谷地遺跡（註2）に含まれる。

4月25日から東ラインのボーリング探査を行なった。地区はIXC144区から始まって、XI A146区を通り東に延びている用水路の中である。作業員6名・調査員3名で行ない、ところどころ試掘を行ないながら進行した。スタートしてから90m程の地点で木質遺物らしきものにあたったのでそこを試掘してみたところ、直立した矢板様の板木が連続しており、しかもその平面形はコの字状に折れまがっていることがわかった（4月26日）。さらに掘り進むとその板木の内側に横木を巡らせて直立材の倒壊を防いでいることが判明した。これを井戸跡と推定しSE001と命名した。SE001は略図を作成し、写真撮影を行なったのち埋戻した。

東ラインのボーリング探査は5月7日で終了したが、課題であった東外画はとらえられなかった。同日午後から南ラインのボーリング探査に着手したが、機材置場とするプレハ

ブの組み立てのため、スタートから45mの地点で中断せざるを得なかった。

註1 須恵系土器に関しては、調査委員・桑原滋郎氏より御教示を頂いた。

註2 「山形県遺跡地名表」(山形県教育委員会・1962年)

まとめ

第2次調査は4月14日から5月11日までおよそ25日間にわたって実施したが、その結果を要約すると次の様になる。

S1・S3・S4の各地区は遺物包含層はあるが遺構は認められなかった。

S3のB5区・C5区は、遺物の出土状態などから川の岸辺などの様な灘みではなかつたろうかと思われる。

出土遺物はいずれも須恵器・須恵系土器などが主なもので、これによりある程度の年代比定が可能と思われる。

東ラインのボーリング探査では東外区はとらえることができなかつたが、井戸跡SE001を発見した。あるいは遺跡の東限はSE001より更に東に延びるのであろうか。

IV 第3次調査

調査期間 7月1日～8月5日

調査地区 SB001地区（第1調査区）、ⅦA66地区（第2調査区）

発掘面積 500m²

調査者 尾形與典、佐藤庄一、名和達朗

調査経過

第3次調査は、第1次調査によって確認されたSB001地区とⅦA66地区の精査を目的としたものである。調査にあたり、SB001地区を第1調査区としⅦA66地区を第2調査区と通称した。第1調査区は小笠原二三・佐藤利吉両氏所有の水田計400m²、第2調査区は丸岡源藏氏所有の水田100m²である。

第1調査区での課題は、SB001基壇跡とSB003建物跡との関係の把握、SB002建物やSB004建物跡の規模の把握などを主なものとした。

第2調査区では、ここで確認されているピットの意味の把握を課題とした。この地区は10数年前に発見されたという柵列の確認を目的に調査されたものだけに、今回もその点を

考慮に入れながら調査した。

調査は第2調査区の発掘から開始した（7月2日）。粗掘りがある程度進んだ段階で地層を検討した結果、第1次調査の際に設定した層序を若干修正するに至った（7月3日）。

Ⅲbの面を露呈していくにつれて、この地区には多数の土壌が存在することがわかつてき（7月3日）。東西に走る溝SD002と南北に走る溝SD010、SD010とほぼ直角に近く交叉する溝SD003と、3本の溝があり、これらの溝を切って多数の土壌があるが、遺物を観察すると両者からは須恵系土器・内黒土器が主に出土しており、その間に著しい相違は認められない。のことから3本の溝跡と土壌群は大きくは單一時期内での切り合いとみられよう。

土壌はほぼ1m内外の径をもつ円形ないし方形を呈し、ところによっては夥しく重複しているものがある。

面整理を終え精査をかかる一方、実測のための遣り方設定を行なう（7月16日）。そして7月30日には精査を終え、写真撮影（7月31日）を行なったのち実測にかかり、8月2日で第2調査区の調査を完了した。

第1調査区は発掘区の設定を終えたのち粗掘りを開始した（7月4日）。この地区は土地所有者が2名いるため排土を分離する必要があり、夫々の排土置場を設定してから行なった。Ⅱ層除去のうち面整理を行ない（7月19日～23日）、この段階でⅦG164区にSB002建物を構成する掘立柱を新たに確認し、SB003建物跡の北辺および西辺を確認した。

またSB001の地下に遺存する埋没部材の範囲をボーリング探査によって確かめた（7月22日）。ⅧL161区では、以前に誰かによって発掘されたらしい丸い掘込みが見つかり、その部分を再発掘したところ、埋没部材の北西隅を検出することができた（7月29日）。

SB003を調査したところ構築法に3種類あることが判明した（7月29日）が、調査員は、根本的な性格の相違に由来するものではなかろうとの見解に達した。

7月22日には調査委員会議を開催し、以後の調査の課題や調査結果についての検討を行なった。

7月28日からSB001に散布する河原石の実測を始め、それがほぼ終った時点で発掘区全体および各近接撮影を行ない（8月2日）、そののち実測にかかり、8月5日に完了した。

層序

第2調査区の地層を検討した結果、第1次調査の際に設定した層序のとらえ方を若干修正することにした。

新旧の層序の呼称、把え方は次のとおりである。

層序対比表

表 3

旧 層 序			新 層 序		
層序名	層 名	性 格	関 連	層序名	性 格
I a	耕作土	耕 土	—	I	耕 土
I b	水田基盤				
II a	粘質土層（無遺物）		—	II	中間層（無遺物）
II b	粘質土層（無遺物）	中間層	—		
II c	粘質土層（含遺物）		—	III a	中間層（含遺物）
III a	シルト層（含遺物）	造構直上	—	III b	造構面（遺物散在面）
III b	シルト層（無遺物）	地 山	—	IV	地山（シルト層）
				V	地山（砂 層）

I a・I b層は統合して I 層とした。水田の表面から基盤までを含む。旧 II 層は中間層として把え、土質の差異によって a～cまで 3 分していたが、II a・II b両層を中間層として把えなおし、II c層を II 層から分離させて III a層とした。旧 III a層はこれまで造構直上として把えてきたが、ここでは III bとし、文化相という意味で把えることにした。これはあくまでも面として把えており、従って概念的には厚味をもたない。旧 III b層は地山であり、新 IV 層は呼称が変っただけである。IV 層の下にグライ化した砂層があり、これを V 層とした。

遺 構

SA003杭列（付図1）

■ L158・159区の、SD007溝跡の東辺に該当するところに杭列が在る。4本あり、径25～40mm長さは20～35cmほどで何れも先端を削いで打ち込んである。打ち込まれている部分の長さは約20cmを測る。かなり細いものであるが、位置からして SD007溝跡に関連するものと思われる。

SB001基壇跡（付図1、PL 5-1）

今次調査で SB001をほぼ露呈させたが、東側でみられた基壇と思われた高まりは北西とくに西の方ではならだかに傾斜しているのみで、基壇の立ち上りを認めることはできず、また観察した範囲では基壇の崩解した痕跡も認められなかった。

SB001上に散在する河原石群の略全域を露呈させたが、この状況からは葺石である可

能性はきわめて薄く、現在その性格は不明である。

封土観察も行なっていない時点では確定的なことは言えないが、少なくとも現在のところSB001を基壇とする積極的な左証は認めがたい。

ⅦN165区の一部を掘り下げ、埋没部材を露呈させたところ、部材の直上から須恵系土器壺が伏せられた状態で出土した(PL 6-1)。この事から埋没部材は須恵系土器の時期に属するものであると考えられる。

ボーリング探査によって埋没部材の範囲確認(Fig 2)を行なったが、これによると部材はSB003の内側でとまっており、西辺での方向は真北からおよそ7度前後西に偏している。また露呈させた部分(ⅦN165区)に関して言えば、部材の方向は真北より5度程西に振れていることがわかった。

SB002建物跡(付図1、PL 7)

ⅦG162区の柱(第1次調査時確認)に続きⅦG164区からも掘立柱が発見されたが、それ以外は発見できなかった。

いま確認された2本の柱に関して言えば、軸線N-5°-W、柱間は芯心距離で450cm(3.5尺)を測る。

ⅦG164区の柱は、外周一面に手斧による仕上げがほどこされており、幅4~9cmの手斧痕が明確に残る。柱の底には根太を敷いてあり、根太は6本ある。材質は2本が桜材で、あとは杉材と思われる。このうち4本が一端を削いで尖らせており、削いだ方は大方が東に向いていた。なおこの掘方の埋土中から須恵系土器の小片が出土している。

SB003建物跡(Fig 2、付図1、PL 5-2)

SB003を追求したところ、これはSB001をとり巻く様にして在ることが判った。そしてその向きはSB001の埋没部材の方向とほぼ一致することも判明した。

SB003は各々を観察してみると構築法に3種類あることがわかった。

その1は地面を摺鉢状に掘りくぼめ、そこに鉱滓や窯壁様の破片などを入れてつき固めたもの。

その2は地面を浅い円筒形(ナベ底状)に掘りくぼめ、比較的上層部にのみ鉱滓などを入れてつき固めたもの。

その3は鉱滓や窯壁様のものはなく、一般の柱穴(掘方)の様相を呈しており、その埋上の上層部に焼成炭化物を含むものである。

表面からは1・2類は同様に見えるが、断面の観察によって以上の様に分類される。

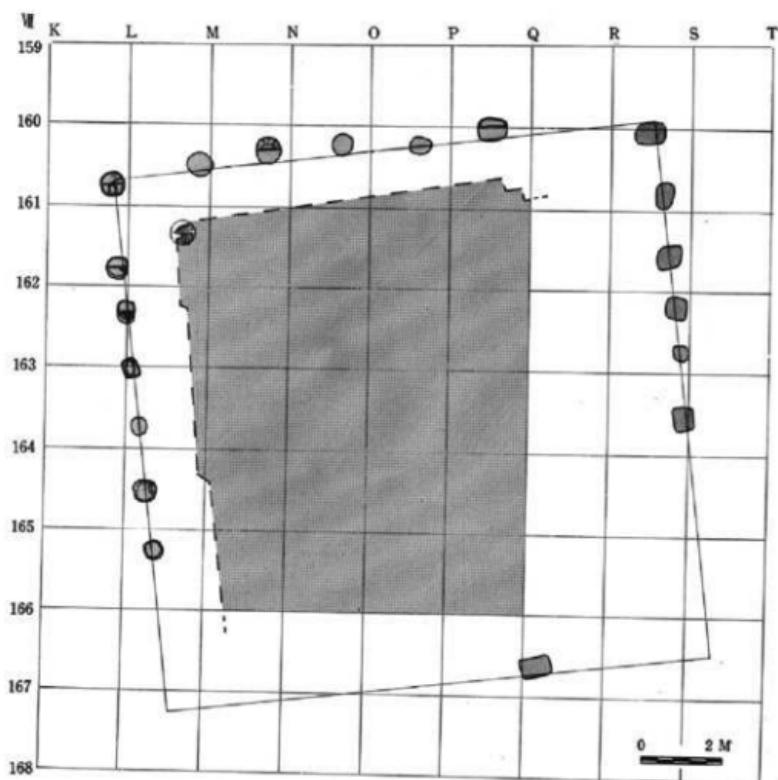


Fig 2 SB003・埋没部材 関係図

これらの構築法の差違のよって来たるところは不明であるが、調査者は材料の入手に関するのではないかと考えており、ここでは一応これらを同一の性格と見ておく。

SB003を図上復原してみると南北8間、東西7間のほぼ方形の建物となり、SB001の埋没部材を相似形に囲繞していることが判る。東西辺・北辺の柱間は各々まちまちであるが、南北軸線は真北よりほぼ7度西に偏し、これは埋没部材と方向が略同一である。このことからSB003はSB001の施設の一角をなすのではないかと考えられる。

SB004建物跡（付図1、PL 8-1）

調査区内ではⅦO156区の柱に連なるものは確認できなかった。

掘方の上端はⅢbの面では把えることができず、この面下約20cmのレベルでやうと検出

できるのである。この意味するところは現在不明である。

SD002溝跡 (Fig 3、PL 9-2・10-1)

VI V70区からVII B69区にかけてある溝で、第2調査区をN-78°-Eの傾きをもって横切る。幅約110cm深さ35cmを測る。土層断面の観察によれば5期にわたる使用が認められる。溝内からは各期に属する遺物が出土しているが、いずれも須恵系土器・内黒土器などに限られ、相互の時間経過は現在のところ非常に短かいものと思える。またSD002は土壌SK049に切られているが両者の遺物面での相違はみられない。

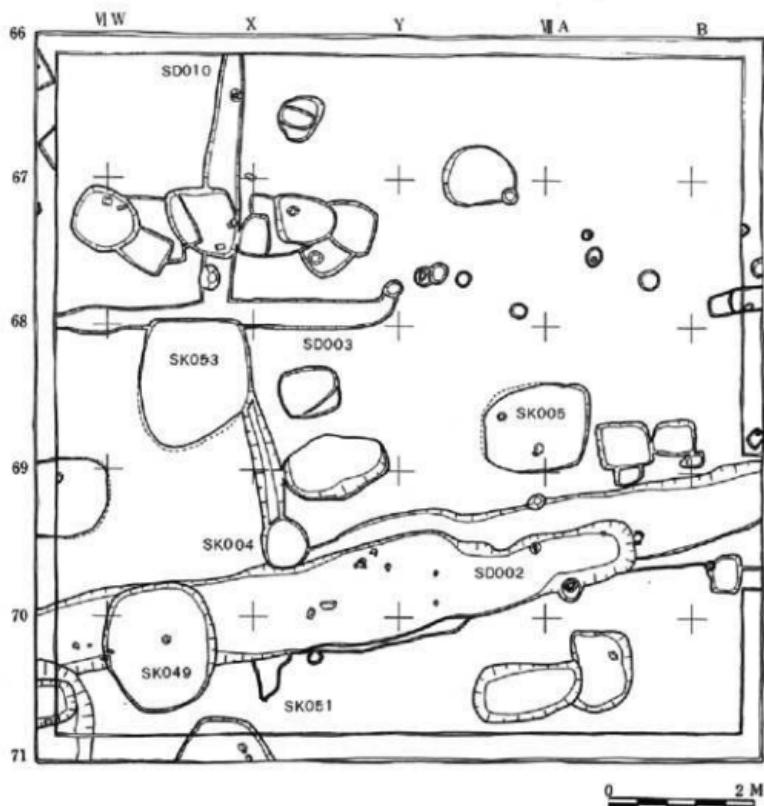


Fig 3 第2調査区構造実測図

SD003溝跡 (Fig 3、PL 9)

VI V67区からVI X67区まで東西にのびる溝跡。幅約40cm深さ約5cmを測り、東端で若干北に折れ、その先端をピットに切られている。後述するSD010溝跡と略直角に交叉しているが埋土に相違がみられず、はじめは同一のものと考えていた。埋土は褐色土。

SD004溝跡 (付図1、PL 8-2)

VII L156区から南下し、途中西折南折しVII K165区にぬける幅およそ50cm深さおよそ25cmの溝であり、方向は大略真北より西に7~10度偏している。溝の北半を幅100~140cm深さ約25cmのやや広い溝が切っており、その流路は同一である。このため元の溝を少しく拡げたものであろうかとも思われたが確認できなかった。

溝はVII M156区で西に折れ、VII K160区で再び南下する。この状況をみるとSD004はSB003を避ける様にして流れしており、このことからSD004はSB003とある時期並存していたものと考えられる。また溝の埋土中からは須恵系土器が出土している。

SD005溝跡 (付図1、PL 4-2)

VII N158区からVII N160区にかけてある。長さ420cm幅50cm内外、深さ4~5cmを測る。南から北に低くなり、方向はN-6°-Wを測る。この溝跡は南端をSB003に切られ、北端を2つの重複したピットによって切られている。埋土の中からは須恵系土器片が若干出土している。

SD006溝跡 (付図1、PL 4-2)

VII N156区からVII N160区までに在る溝跡で確認長660cmを測り、幅60cm内外、底部はほぼ水平であり方向は真北より9度内外西に偏する。一部をピットに切られている。埋土中から須恵系土器片が出土している。

SD007溝跡 (付図1、PL 4-2)

VII J156区からVII L160区にかけて在る溝跡。確認長730cm、幅90~120cm深さ6cm内外、底部はほぼ水平である。方向はN-30°-W、南端をSD004に切られている。

SD008溝跡 (付図1、PL 4-2)

VII H156区からVII J159区にかけてある溝。北側をSD009に切られており、南端はVII J159区付近で浅くなつて消える。確認長630cm幅60cm内外、深さ約5cm方向およそN-23°-

Wを測り、北に低くなる浅い溝である。埋土中より須恵系土器の小片が小量出土している。

SD009溝跡 (付図1、PL4-2)

VIIH156区からVIIJ160区にかけて走る溝。方向は真北より西に約10度偏する。確認長約1050cmを測り、VIIJ159区で東に折れる。幅は南北辺で約70cm東西辺で約30cm、深さは3~8cmを測る。東端は現行の暗渠に切られていて確認できなかったがあるいはVIIK160区付近でSD004に接する可能性をもつ。

SD010溝跡 (Fig3、PL9-2)

VIW66区から南下し、SD003と交叉してVIX69区に至る溝跡。途中SK014・SK053・SK044などの土壌に切られ、とくにSK040によって南端を切られておりSD002との関係は不明である。溝内からは須恵系土器・内黒土器などが出土している。

土壤群 (Fig3、PL9-2)

第2調査区にはおよそ30にのぼる土壤が存在し、重複関係を調べた範囲内ではいずれも溝跡を切っていることが判明した。

土壤の径は小さいもので60cm内外、大きいもので150cmを測る。深さは5cmから45cmと種々あるが埋土はおおむね次の4層からなる。

- 1) 暗褐色微砂層
- 2) 黒色粘質土層 (腐蝕炭化物・遺物共に多い)
- 3) 暗褐色粘質土層 (腐蝕炭化物・遺物共に少ない)
- 4) 青黒色粘質土層 (腐蝕炭化物多く遺物少ない)

この中にはSK051土壤の様に須恵器・内黒土器を伴出するものがあり若干の時期の差違は認められるが、大半は須恵系土器を伴出し、大略同時期のものと思われる。

遺 物

第1調査区の遺物は土器が殆んどであり、その中でも須恵系土器が圧倒的に多い。他には須恵器長頸壺の頸部 (VII N157区)、ヘラ切りの須恵器坏片 (VII L159区)、北宋銭 (至道元宝、聖宋元宝、詳符通宝)、明錢 (永樂通宝) (VII H165区)、種々の木製品、用途不明土製品 (註1) などが出土している。

第2調査区の出土遺物は土器のみである。そのうちでも須恵系土器・内黒土器などが圧

倒的に多く、須恵器は非常に少ない。

註1 第1次調査報告書記載の遺物、No3001～3005と同一のものである。

まとめ

第1・第2両調査区の精査によって次のようなことが判明した。

SB001は現状では基壇跡であることを説明する積極的な資料は確認されなかった。

SB001とSB003は同一の建物である可能性が強くなった。埋没部材とSB003の方向が同一であることはこれを裏付ける証左のひとつといえよう。

SB001・SB003とSD004はある時期並存していたものと思われる。

SB001の地下に遺存する埋没部材とSB002には須恵系土器が伴うことがわかった。

SB004の掘方はⅢb面ではとらえられなかつたが、この意味する所は未だ不明である。

SD002は5期にわたる使用が認められたが、その時間経過はきわめて短かいと思われる。

SD002・SD003・SD010各溝跡は何れも土壤群に先行するが、その時間経過はきわめて近接していたものと考えられる。

出土遺物から見れば第1・第2両調査区共に須恵系土器を伴ない、大局的に見ればほぼ同一の時期に包含されているものと思われる。

V 第4次調査

調査期間 10月20日～11月15日

調査地区 L1鉄塔予定地

SE001井戸跡

南ラインボーリング探査

ⅦO287・288区、ⅧP309・310区試掘

発掘面積 248m²

調査者 尾形與典、佐藤庄一、佐藤正俊

調査経過

第4次調査は、送電用鉄塔建設予定地のうち残る大鉄塔予定地(L1)の試掘調査と、東ラインボーリング探査によって発見された井戸跡SE001の確認調査それに南外画確認の

ためのボーリング探査を目的として行なった。

L1地区の発掘区設定を行なう一方、遺跡からほど近い日向川土地改良区の事務所に行き、明治年間に作成されたという堂の前地区を含む絵図面の調査を行なった(10月21日)。

L1は10月22日から発掘を開始した。掘発区はⅡE163のポイントを中心にしてヴァン・ギッフィン式四分円法の様な形で四方に6グリッドづつ設定していたがのち東西方向に2グリッドづつ延長した(11月1日)。

Ⅲb面まで掘り下げ、面整理を行なっていたところⅠV・W163区からⅡE158・159区にかけて北東一南西に走る溝SD011を発見したので、それを追跡するためにⅡA160区とⅡC158・159区の計3グリッドを試掘することにした(11月4日)。これによってⅡA160区・ⅡC159区にもこの溝が存在し、先の両者は連続することが確認された。

またⅡD166区に東西に走る溝SD012を発見し、この確認のためにⅡB166区の試掘を行ないさらに西にのびることを確認した。

調査区内にはおよそ50を数えるピットが散在するが、そのうちでもⅠY163区からⅡC163区にかけて検出された東西に並ぶピット群は建物を構成するのではないかと思われたが、期間の関係でそれ以上追求はできなかった。

精査を終えたのち写真撮影を行ない実測にかかった(11月8日～12日)。

SE001井戸跡は10月30日に発掘区を設定し粗掘りにかかった。

第2次調査で試掘した箇所を再検出し更に東西に延長して計4mとして、井戸棒の状態を観察するためのトレンチとした(10月31日)。

SE001の掘り方が把えられずに苦心したが何とかプランをとらえたところによると、ほぼ北東に長くなる鶏卵形を呈するものであった(11月5日)。概略プランを確認したところでは、井戸棒は北西一南東方向から押圧された様な平行四辺形を呈していた。

あらまし調査し終えた段階で写真撮影を行ない、実測にかかった(11月10日)。

11月11日には本年度2回目の調査委員会議を開催した。

南外画確認のためのボーリング探査は10月28日から開始した。探査の結果3カ所に大きな落込みが認められた。このうちⅣ287・288区、ⅤP309・310区の計4グリッドを試掘したがいずれも自然の落込みと思われるものであった(11月6日)。

南ラインのボーリング探査は11月6日に完了したが南外画は確認できなかった。

遺構

SD011溝跡(付図2、PL11)

ⅠV163区からⅡE158区にかけてほぼ北東に走る溝跡で幅約60cm深さ13～20cmを測る。断

面は逆台形を呈し、埋土は炭化物を多量に含む黒褐色土の單一層で、遺物は須恵系土器を主体とする土器類が多量に含まれる。

SD012溝跡（付図2）

II B166区から II D166区にかけて東西に走る溝跡で幅80~90cm深さ約5cmを測る。埋土は暗褐色粘質土の單一層であり遺物は含まない。

SE001井戸跡（Fig 4、PL12）

第2次調査の東ラインボーリング探査の際に発見された井戸跡で X Y146区を中心として存在する。発掘区は X X145区を北西隅とし X A146区を東南隅とする6グリッド24mである。

先に試掘した箇所を再検出し、井戸枠および掘方の観察のためのトレンチとした。トレンチは幅60cm長さ4m、146ラインを南辺とし X X145区から XI A145区に在る。

XI A146区第II層中より寛永通宝など10枚ほどの古銭が出土しているがSE001とは無関係と思われる。

掘方は歪んだ鶏卵形を呈しており、井戸枠は146ラインを中心として掘方のやや東寄りに位置する。井戸枠は北西—南東方向から圧力を受けた様に歪んだ平行四辺形を呈しており、幅10~20cmの板で構成され、そ

の垂直材の内側には幅6cm厚さ10cmの横木が巡らされて枠木の倒壊を防いでいる。横木どうしは枘によって連結されている。トレンチ南壁に現われた土層断面の観察によれば枠木を越えて放物線状に灰層があり、これは井戸廃棄後間もないものと見られるが、その灰層の上の埋土から須恵系土器が出土している。おそらくはSE001の廃絶とそれほど隔らない時期のものと思われる。

SE001の調査はプラン確認にとどめたため多くは不明のまま残ったが、遺物から見ておそらくは須恵系土器

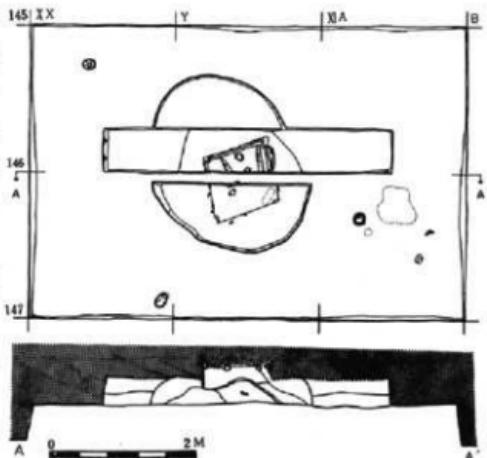


Fig 4 SE001 井戸跡実測図

の時期に伴なうものと考えられ、あるいは堂の前遺跡の一角をなすものではなかろうかとも思われる。

またSE001の周囲に3個のピットが発見され覆屋の支柱穴かとも思われたが、XX146区のそれはSE001と反対方向に傾斜するピットであり、現在のところ支柱穴の可能性は薄いと思われる。

ピット群（付図2、PL11-2）

L1地区には先述した様に50個にのぼるピット群があるが、中でもI Y163区からII C163区にかけて検出されたピット群は発掘区内では唯一まとまりを示すものである。

このピット群は大小14個のピットから成り、確認した範囲内では東西両端で南に折れまがる蛇形を呈しており、南に延びて建物跡を構成するのではないかと思われたが、期間の関係で拡張はできなかった。

まとめ

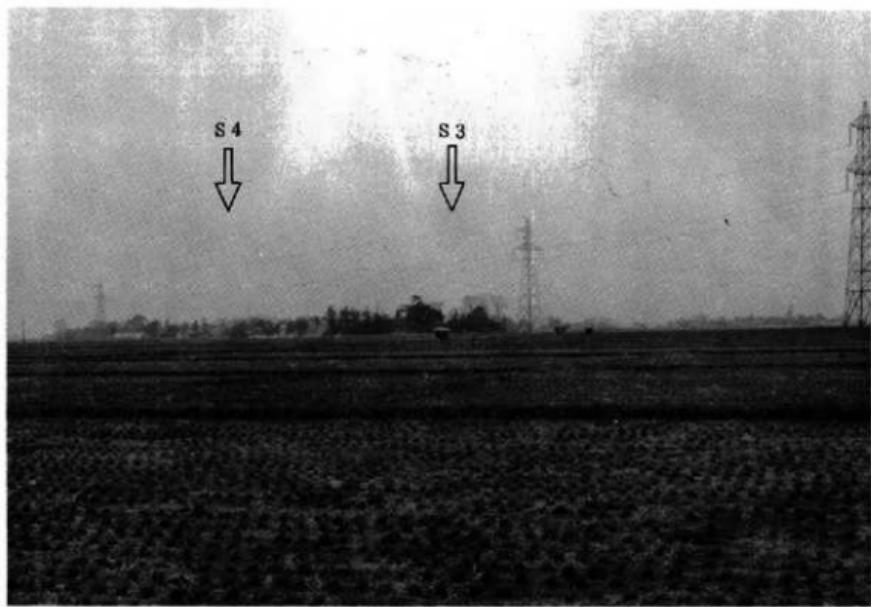
第4次調査は10月20日から11月15日までおよそ23日間にわたって実施したがその結果を要約すると次の様になる。

南ラインのボーリング探査では南外画の確認はできなかった。

井戸跡SE001のプラン確認調査によってSE001の概略を知り得、出土遺物から見ると須恵系土器の時期とそれほど隔らない以前であろうことが考えられる。

L1鉄塔予定地では溝2本とピット群が検出されたが、このうちSD011溝跡の出土遺物から須恵系土器の時期に包含されるであろうことが推定される。

図 版



1 S 3・S 4 鉄塔予定地遠景



2 S 3 完掘状况



1 S3-C5区 遗物出土状况(1)



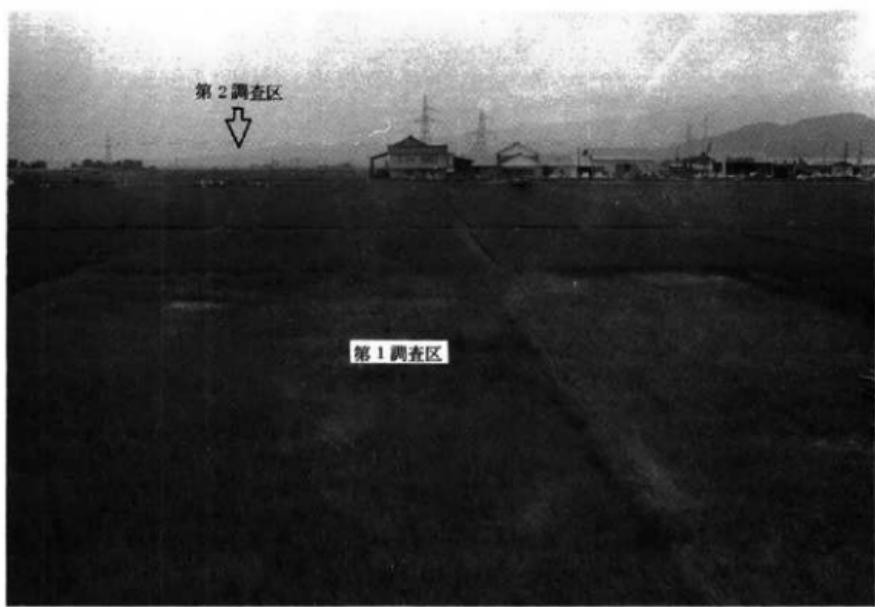
2 S3-C5区 遗物出土状况(2)



1 S 1 完掘状況（南西より）



2 S 1-E 5区 遺物出土状況



1 第3次調査、発掘区景観



2 第1調査区発掘状況 (部分)



1 SB 001 河原石散布状況（南西より）



2 SB 003 建物跡



1 SB001 埋没部材



2 埋没部材 北西隅部(北より)



1 SB002 建物跡



2 雷G162区 柱根



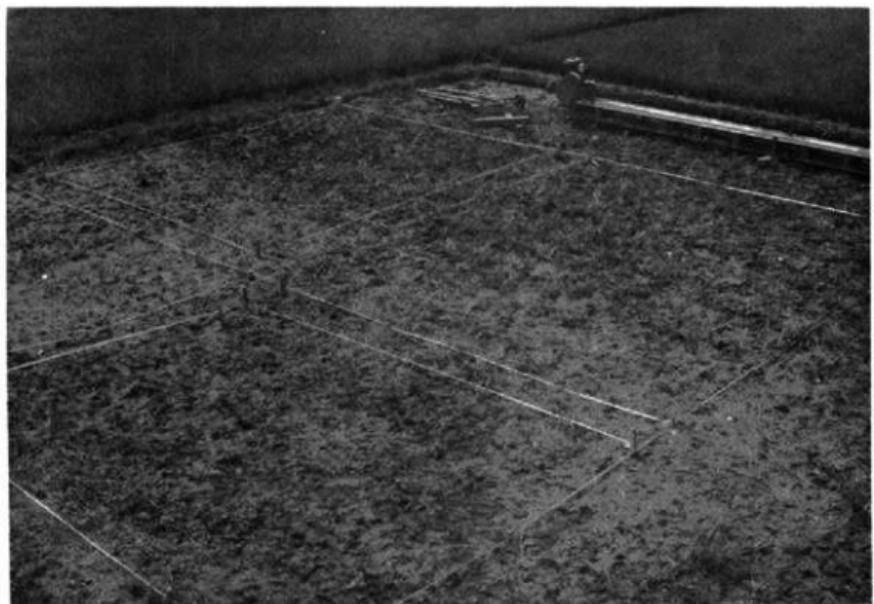
3 雷G164区 柱根



1 SB 004 柱根部（東より）



2 SD 004 溝跡（南より）



1 第2調査区 発掘前状況



2 第2調査区 発掘状況



1 SD002遗物出土状况



2 SK049遗物出土状况



1 L1地区 発掘状况



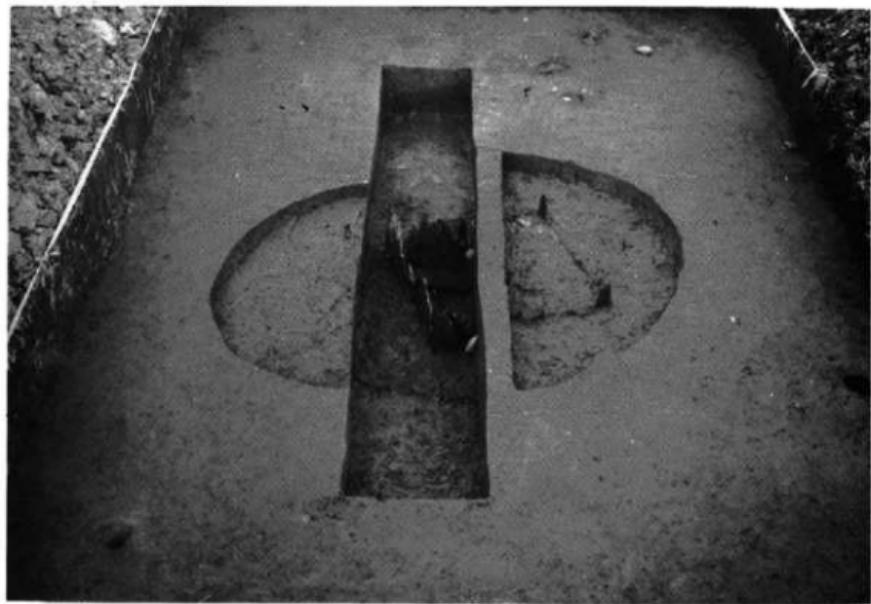
2 IV163~IC163区



3 IE157~IE162区



1 SE 001 井戸跡(東より)



2 SE 001 井戸跡全景(西より)

山形県埋蔵文化財調査報告書第7集

堂の前遺跡

昭和50年度調査略報

昭和51年3月25日 印刷

昭和51年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

教育庁 文化課

印刷 大風印刷
